

11月になりやっと秋らしい気候になりました。今年も短い秋になりそうな気配です。

部落解放研究くまもと第90号を発刊しました。今号は3本の原稿を執筆いただきました。

高知の吉田文茂さんの「教科書をタダにした闘い」は、高知市長浜で組みまれた教科書無償化闘争についての報告です。内容については本誌を読んでもいただきたいと思います。豊富な資料を提供していただき掲載できたことをうれしく思います。当時の新聞や学校の様子わかる写真など、普段見ることのあまりない貴重な資料です。じっくり見ていただければ新しい発見があるのではないかと思います。

矢野治世美さんの「上益城中申渡」は、幕末から明治初期にかけての上益城郡で行われた裁判記録の写しです。解題でも述べられているように、当時のくらしが垣間見える史料です。被差別民衆が為政者にとって重要視されてこなかったために、古文書を読んでもなかなか記述がありません。数少ない記述をつなぎ合わせて、全体像をさぐる時間のかかる作業ですが、こうした史料をいねいに、しかも行間を読むことからしか始まらないと改めて感じます。

水俣芦北公害研究サークルの梅田卓治さんからは、「水俣病患者さんとの出会い、学んだこと」を寄稿していただきました。

大阪の土田光子さんが以前次のように書かれていました。

「差別の現実を経験しながら、そのしんどさに負けず乗り越えた人と出会った子どもたちは、そのたくましさで圧倒され、『差別されたかわいそうな人たち』という思い込みや『差別されたから自分を不幸だと思っている人』という決めつけが、木っ端みじんに吹き飛ばばかりか、反対に自分たちの方が励まされていることに気づくのだ。

(中略) この圧巻ともいえる180度のコペルニクスの転回は、真っ向から差別の現実を取り上げ、しかも、その現実を変えようと闘ってきた生身の当事者と直接出会い、ひざを交えて交流することでしか生まれないものだ。」(「暴露と曲解 部落ってどこ？」 部落解放・人権研究所 P80～P81)

上記の土田さんの文章は、部落問題と向き合った経験のある教職員に取っては、ほんとうに宋だと実感できるものだと思いますが、梅田さんの水俣病患者さんとの出会いも、それと重なるものでした。自らを問い直す率直な言葉が心を打ちました。

あらためて、貴重な原稿を寄せていただいた執筆者の方々に感謝いたします。